©日本記者クラブ 2024

日本記者クラブ会報

公益社団法人　日本記者クラブ　〒100-0011　東京都千代田区内幸町2-2-1　日本プレスセンタービル　TEL. 03-3503-2722　https://www.jnpc.or.jp/

110年ぶり　尊富士（右）が豪ノ山を押し倒し、新入幕では110年ぶりの優勝を遂げた=3月24日、エディオンアリーナ大阪　撮影：加藤　侑大（時事通信大阪支社編集部）

理解が深まって反芻する そんな記者会見の楽しみも

東京・杉並に住んでいた30年前、最寄り駅近くの小さな焼き鳥店のなじみになった。その店の少し噛み応えのある焼き鳥の奥深さが、最初はわかっていなかった。通ううち、ここはとんでもない店かもしれないと気づくころには、店は大きくなり、なかなか暖簾をくぐれなくなり、ほどなく東京の中心へ進出していった。噛みしめ、自分が成長してわかる味わいがあると学んだ。

記者会見にも似たところがある。同じ言葉も、受け止める側の理解によって深みは違ってくる。昨年6月、カンヌ国際映画祭の最優秀男優賞を受賞した役所広司さんの記者会見は、深みを理解するには少し酷なものだった。何せ、ほとんどの参加者が映画を観ていないものだから、偉業だということはわかっても、映画や役柄について語る役所さんの言葉が心に響いた、とまでは言えなかったように思う。

今年になって「パーフェクト・デイズ」を観て、日本記者クラブの会見動画を見直すと、ああ、なるほど、そういうことだったのかと言葉がしみる。反芻する記者会見の面白さ、といったところだろうか。そんな記者会見をこのクラブはもう54年も積み重ねてきた。そして時代の証言集というべきその記者会見の多くに、日本記者クラブのホームページで触れることができる。テーマを打ち込めば、関連の記者会見が出てくる便利な機能もある。機会をみて、時代を画した「ことばへの旅」へ、ぜひ。

（専務理事　江木慎吾）

24年度 赤字予算に逆戻り

会員・事業収益減、人件費は増

２０２４年度の日本記者クラブの予算と事業計画が３月26日に開かれた臨時社員総会で承認された。経常収益（収入）は３億４０７１万４９００円、経常費用（支出）は３億５７０６万５０００円。23年度に３年ぶりに収支均衡予算を組むことができたが、赤字予算に逆戻りした。減価償却費として計上する３５０万円を加えた１９８５万１００円が、当期の一般正味財産の減少額となる。

収入全体の85％を占める受取会費が個人会員と法人賛助会員の減少によって前年度に比べ２８５万円の減となる。事業収益については、コロナ禍以前に比べ８割弱までしか回復せず、前年度に比べ１９０万円減になるとみている。

経常費用に関しては、共益費や光熱費等の増額に伴う支出増と、人件費の増額が避けられない状態だ。

日本プレスセンターからクラブが借り受ける施設の借室維持費は、全支出の５割を占める。借室維持費のうち、共益費が約２６０万円、空調・光熱・水道代が約１１０万円、それぞれ前年に比べて増える見通しだ。

人件費については、コロナ下の赤字状態の中、欠員を埋めずにクラブを運営してきたものの、そのひずみが生じており、１人を新たに雇用することにした。この人員増などを含めて約６３０万円の増額となる。

これらの支出増に加え、施設の設営方式の見直しに伴い新たな支出が発生する。さらに、経理業務を中心に業務システムの回収が必要になり、これに伴う減価償却費を計上する。

24年度の事業計画についてはこれまで同様、公益目的事業である記者会見の開催、日本記者クラブ賞の授与、記者クラブ会報の発行の３分野を充実させ、記者研修、記者ゼミなどの教育機能も追求する。さらに23年度に復活した懇親、交流の場も引き続き設けていく方針だ。

こうした公益目的事業をしっかりと展開し、ジャーナリズムの発展に寄与していく上で財政基盤の安定は欠かせない。その意味で赤字予算となったことは大きな懸念材料だ。収益拡大と経費抑制の方策について、あらゆる角度から事業を見直していかなくてはならないと考えている。

２０２３年度の予算を補正

２０２３年度の途中に、借室料に含まれる共益費の値上げがあり、さらに空調・光熱・水道代、人件費の時間外給等が予算を超える見通しとなった。予算を超える支出は行えないため、余裕のある項目から相当分を回す補正を行った。予算の総額に変更はない。

貸室料を10％値上げ 10月実施にご理解を

当クラブが日本プレスセンタービルから借り受けている施設の共益費の値上げ、光熱費など諸費用の高騰を受け、10階ＡＢＣホール、９階会見場、大会議室、小会議室の貸室料をそれぞれ10％値上げさせていただくことにしました。２０２４年10月１日以降に使用される貸室に適用します。周辺の会議室の賃料を比較検討し、前回値上げから10年以上が経過していることも踏まえ、３月５日に理事会の承認を受けました。大変心苦しい限りですが、ご理解たまわりますようお願いします。（江木）

目次

▼今月のクラブゲスト 3・4
▼会見リポート 5・8
橋本学 東京電機大学大学院特別専任教授／佐々江賢一郎 日本国際問題研究所理事長／松尾豊 東京大学大学院教授／竹増貞信 ローソン代表取締役社長／柯隆 東京財団政策研究所主席研究員／田村智子 日本共産党委員長／久米晃 元自民党本部事務局長
▼府中刑務所 視察 8
▼ワーキングプレス 9・10
政治倫理審査会 読売新聞社 足利浩一郎
日経平均が最高値更新 時事通信社 伊藤一馬
▼新・列島報告 11・12
熊本県 ＴＳＭＣ新工場開所 熊本日日新聞社 山本文子
山梨県 県知事の政治資金不記載 テレビ山梨 芹沢年延
▼リレーエッセー 13
祖母をあやめた21歳のケアラー 毎日新聞社 春増翔太
▼書いた話書かなかった話 14・15
「やっぱり、戦争は嫌いだ」 大岡昇平と福田恆存 小山鉄郎
▼会議報告／24年度予算 16・17
▼記者ゼミ 18
▼写真回廊 20

今月のゲストの皆さん

ゲスト全員の会見リポートは右のQRコードを開きウェブサイトで読めます。出席欄の「会」は会場、「オ」はオンラインの参加人数です。

辻 陽（つじ あきら）さん 近畿大学教授

「地方議会は機能していないといわれるが、議会や議員のせいではない。そうできない制度がある」「議会の権限は限定され、条例案の提出権、再議権を持ち専決処分ができる首長の権限が強い。議会の機能強化には議員の専業化が必要だが、議員報酬増は財政上厳しい」

■２・26／出席：会12人、オ27人／「地方自治のいま」④／司会：澤田信孝委員

稲継 裕昭（いなつぐ ひろあき）さん 早稲田大学政治経済学術院教授

「若者の地方公務員離れは社会課題。年功的賃金体系を忌避し就職先に公務員を選ばない」「自治体はやりがいや成長の機会を提供していない。若手職員の離職も多数」「ごみ収集など自治体業務は住民生活と直結している。競合他社はなく良質な労働力の確保が不可欠」

■２・26／出席：会６人、オ20人／「地方自治のいま」⑤／司会：小林伸年委員

Sergiy Korsunsky（セルギー コルスンスキー）さん 駐日ウクライナ大使

可能な限りの方法で支援してほしいと日本に訴えた。Ｇ７メンバー国がウクライナと締結している安全保障協力に関する２国間協定を日本とも交渉中と説明。「日本は戦後や震災後の復興の経験があるので、ウクライナの復興における世界一のパートナー」と述べた。

■２・27／出席：会31人、オ33人／司会：出川展恒委員／通訳：大野理恵さん

愛知 治郎（あいち じろう）さん 元参議院議員

2019年の参院選中に自民党選対委員長だった甘利明氏から現金100万円を提供された際に、党からの金と思い受け取り、収支報告書に記載したと説明した。「現金のやりとりは記録が残らぬ昭和のあしき慣習。裏金は根絶すべき。政治資金は振り込みなど透明化を徹底して」

■２・27／出席：会13人、オ27人／「〈政治とカネ〉を問う」⑤／司会：川上高志委員

森本 章倫（もりもと あきのり）さん 早稲田大学教授

「都市計画では平時から未来の緩やかな変化の先読みと、それに向けた調整が重要。災害による急激な変化への備えも必要だ」「能登半島地震の復興計画は超高齢化を考慮し、臨機応変に対応すべきだ。10年では長い。急ぎすぎると被災者が置き去りになる」

■２・28／出席：会11人、オ32人／「能登半島地震」⑧／司会：黒沢大陸委員

加茂 具樹（かも ともき）さん 慶應義塾大学教授

「文化大革命後、正当な意思決定は集団で行う『集団支配』の合意が堅持されてきたが流動し、中国政治に権力の個人化が進んでいる」「国内外に対する『不安全感』があり、強い権力によって政策に従わせる必要があると考え、習近平氏への権力集中が進んでいるのでは」

■３・６／出席：会27人、オ56人／「中国で何が起きているのか」⑨／司会：高橋哲史委員

佐藤 孝弘（さとう たかひろ）さん 山形市長

「地方が直面する課題は都市機能の維持だ。人口規模が小さくなるほどサービス業の維持は困難だ」「少子高齢社会に対応した政策で人口減少を食い止め、中長期にはAIなど新技術で、人口減でも都市機能や公共サービスを提供できることを目指して取り組んでいく」

■３・７／出席：会７人、オ18人／「地方自治のいま」⑥／司会：小林伸年委員

加藤 博和（かとう ひろかず）さん 名古屋大学大学院教授

公共交通政策が専門。「地域公共交通の担い手たる運転者の不足は以前からあったが、いよいよ全国レベルでまずい状態だ。特に若い人が入らない」「明らかに運転者に正当な対価を支払えていないのが原因で、まず自治体、国の支援を手厚くすることが急務だ」

■３・13／出席：会15人、オ26人／「働く人材クライシス」③／司会：菅野幹雄委員

結城 康博（ゆうき やすひろ）さん 淑徳大学教授

「ヘルパーとケアマネの人材不足は深刻。2035年、団塊世代が85歳になる頃、介護保険があっても人手不足でサービス利用は困難になる」「訪問介護の基本報酬引き下げは将来に禍根を残す失策。新規事業展開への機運を損ない訪問介護サービスの供給増は見込めない」

■３・14／出席：会15人、オ37人／「働く人材クライシス」④／司会：迫田朋子委員

Glen S. Fukushima さん　米先端政策研究所上席研究員

選挙戦の結果を左右する要素が三つ。「トランプ前大統領の四つの刑事事件の結果がどう出るか」「バイデン大統領の知力・体力の問題」「第三党の影響。第三党の候補者が出ることでバイデン氏の票を取り、結果的にトランプ氏が勝つシナリオは現実問題としてある」

■3・14／出席：会37人、オ53人／「2024 米大統領選」②／司会：藤井彰夫委員長

島崎 謙治さん　国際医療福祉大学大学院教授

「国民皆保険によって生まれた膨大な医療ニーズを、医師の過重労働で吸収してきた」「医療・介護分野では、財政より人的資源の制約が深刻。2030年をピークに人口は減っていく。医師養成数の単純増はない。医師の偏在是正など、医療資源の再配置は重要」

■3・18／出席：会11人、オ25人／「働く人材クライシス」⑥／司会：猪熊律子委員

高原 明生さん　東京大学教授

「習近平体制は近代化・富民強国パラダイムに固執している。社会・経済問題で矛盾が生じ行き詰まり感があり、水が漏れるように多くの中国人が国外脱出している」「ゼロコロナ政策は大失敗だった。次の伝染病がきたら、かなえの軽重を問われ、変化のきっかけになる可能性もある」

■3・19／出席：会28人、オ53人／「中国で何が起きているのか」⑪／司会：高橋哲史委員

石村 和彦さん　産業技術総合研究所理事長

「1989年、世界時価総額上位30社に日本企業21社が入っていた。2024年は0社。産業競争力は低下した」「競争力強化にはイノベーション創出と産官学の役割分担が必要」「イノベーション創出の鍵は多様性。文化、領域が違う他社や研究機関との連携は多様性をうむ」

■3・21／出席：会14人、オ35人／「大学どこへ」⑩／司会：黒沢大陸委員

小島 美里さん　NPO法人暮らしネット・えん代表理事

「介護の人材不足は20年来の課題。特に訪問介護の人手不足感は高い」「訪問介護の基本報酬の引き下げが決定した。事業所の約4割は赤字。いくつの事業所が閉鎖するのか。減額は低所得の老老世帯や一人暮らしを打ち捨てることにつながる。一日でも早い撤回を」

■3・21／出席：会8人、オ27人／「働く人材クライシス」⑦／司会：小林伸年委員

末宗 徹郎さん　地域総合整備財団理事長

「人口減に直面する地方が弱体化すれば、地方からの人材流入に頼る大都市も衰退する」「持続可能な地域づくりには、地方が地域価値を磨き上げる積極的戦略と、公共施設管理の効率化戦略が大事」「国は東京一極集中是正の先の地域づくりビジョンを提示すべきだ」

■3・25／出席：会7人、オ24人／「地方自治のいま」⑦／司会：小林伸年委員

磯崎 典世さん　学習院大学教授

「韓国の選挙管理委員会は政府から独立し、選挙違反の取り締まりや政治資金の事務管理などを担う」「2004年の選挙で保守政党が守旧派と規定され過半数割れに。その保守が主導して政治腐敗への対応に乗り出し、政治関連法改正で規制が大幅に強化された」

■3・26／出席：会10人、オ29人／「〈政治とカネ〉を問う」⑦／司会：澤田克己委員

＊下記のゲストの会見リポートは5～8ページに掲載しています

橋本 学さん　東京電機大学大学院特別専任教授

■3・6／出席：会14人、オ46人／「能登半島地震」⑨／司会：黒沢大陸委員

佐々江 賢一郎さん　日本国際問題研究所理事長、元駐米大使

■3・8／出席：会42人、オ83人／「2024 米大統領選」①／司会：杉田弘毅委員

松尾 豊さん　東京大学大学院教授

■3・15／出席：会30人、オ73人／「生成AI」③／司会：倉澤治雄委員

竹増 貞信さん　ローソン代表取締役社長

■3・15／出席：会19人、オ31人／「働く人材クライシス」⑤／司会：今井純子委員

柯 隆さん　東京財団政策研究所主席研究員

■3・18／出席：会28人、オ57人／「中国で何が起きているのか」⑩／司会：高橋哲史委員

田村 智子さん　日本共産党委員長

■3・19／出席：会45人、オ41人／司会：川上高志委員

久米 晃さん　元自民党本部事務局長

■3・22／出席：会44人、オ45人／「〈政治とカネ〉を問う」⑥／司会：川上高志委員

「能登半島地震」⑨

橋本　学

東京電機大学大学院特別専任教授

3月6日

「科学的知見」鵜呑みに警鐘

命を守る知見として防災に用いられている地震学の研究成果。しかし、橋本氏は「研究成果とは言っても実際はぼやっとした仮説。研究者もろくに検証をしていない。そうして出来上がる社会は安全なのか」と、地震学の「科学的知見」を鵜呑みにすることへの警鐘を鳴らす。

橋本氏は南海トラフ地震の長期評価に使われる計算式「時間予測モデル」の問題点を指摘する論文を複数発表しており、この日も長期評価を基に作成される全国地震動予測地図について言及。予測地図の「正答率」を調べたところ、２０１５年から９年間で震度６弱以上の揺れを観測した22地震のうち、発生確率が「高い」とされている６％以上の地域に影響があったのは９回だけだったという。

「さすがに外しすぎている…」との印象を受けた橋本氏は「次は南海トラフだと思い込ませ、（予測地図は）罪が重い」と指摘。その上で「低確率の地域の防災が手薄になる実態があり、公表はやめた方がいい」と主張した。

また、南海トラフの発生可能性が高まったとみなされた場合に政府が発表する「臨時情報」についても議題に挙げ、一週間の事前避難を行う「巨大地震警戒」は10回中８～９回、地震の備えを再確認する「巨大地震注意」は１００回中98～99回外れる情報であると解説した。

問題は、情報の精度がこれだけ低いにも関わらず７割以上の人が、「情報が発令されたら50％以上地震が起きる」と思っているとの調査があることだ。橋本氏は「専門家が捉える感覚と一般の人の感覚と乖離がある」とした上で「国民が地震は突発的に起きることを忘れないか懸念がある」と臨時情報の仕組みを批判した。

記者たちには地震学の成果には大きな不確定性があることを認識する必要があり、情報を無批判に伝え、社会の期待をあおることは謹んでほしいと訴える。そして「科学者が言うことにも懐疑心を持って臨んで」と呼びかけた。

東京新聞社会部　小沢　慧一

「２０２４ 米大統領選」①

佐々江　賢一郎

日本国際問題研究所理事長

3月8日

国家的危機には米国民団結

シリーズ企画「２０２４ 米大統領選」を始めた。

第一回は駐米大使としてオバマ（民主）、トランプ（共和）両政権と向き合った佐々江賢一郎氏。ウクライナやガザで戦争が続く混乱の世界で「この大統領選はさらなる世界のリスクになる懸念がある」との冒頭発言に、ぐっと引き付けられた。

もちろんトランプ氏当選の場合にアメリカ・ファーストに翻弄される悪夢が頭に浮かぶが、選挙の不正を訴えて起きる大規模な反乱も想定する必要があると言う。前回大統領選後の議会襲撃には驚愕したが、今回は州、議会を巻き込み周到に準備された暴力的な行動が起きるかもしれない。

そうなれば、米国は自ら民主主義を崩し道徳的なリーダーシップを失う。

それにしてもなぜまた共和党はトランプ氏なのか。答えは「彼は分かりやすい。高邁なことは語らないが、われわれの人だと思わせる」。少数派や移民が力を強める国で焦燥感を抱く大衆の心をつかむ技だ。

「もしトラ」に日本はどう対応すべきか。権威主義への好感、同盟不信、保護主義と不安材料は多い。

８年前に大統領に当選した時は「中国と日本は同じところに並んでいた」トランプ氏だが、今は違う。「自信をもって対応するべきだ」というアドバイスだ。

重要なのはレトリックに惑わされずに実際の行動で判断し、基本的価値観と異なる政策には同盟国として反対することとの指摘である。米政治潮流の変化に耐え抜く長期的なレジリエンスの必要性も唱えた。

今は悲観論ばかりの米国でも、「米国民は国家的危機には団結する」。「もしトラ」話が多かったが、「トランプ氏と決め打ちしているわけでない」と最後に付け加えた。

佐々江氏の希望で対談形式となった。和やかな雰囲気で話が深まり、濃厚な１時間だった。

シリーズ担当企画委員　共同通信社特別編集委員兼論説委員　杉田　弘毅

「生成AI」③

松尾　豊

東京大学大学院教授

3月15日

アジア市場に日本の活路

米オープンAIがチャットGPTを公開したのが2022年11月末。「完全にモードが変わった。すごいスピードで事態が進んでいる」。松尾教授はそう分析したうえで、生成AIは「インターネットやトランジスタ、エンジン、電気などに匹敵する数十年に1度の技術」とする米国の研究者の見立てを紹介し、そのインパクトの大きさを指摘した。

生成AIを巡る日本政府の議論は、23年5月に「AI戦略会議」が発足するなど本格化してきた。松尾教授はAI戦略会議の座長も務める。スマートフォンや検索エンジンを巡る議論で日本は世界に遅れを取ってきたが、「かつてないレベルで早く対応している」と生成AIを巡る日本の対応を評価。国際的なルール作りを目指す「広島AIプロセス」についても、「最先端の技術で日本がリードしている」と指摘した。

一方、国内企業の開発状況については厳しい見方を示した。大規模言語モデルの性能を示すパラメーターの数を比較すると、日本企業のモデルは100億程度で、1兆～2兆の海外のモデルに、2桁遅れている状況だという。

松尾教授は、医療や金融・製造分野などの巨大産業で生かされるAI開発を目指すことが、日本の戦略になると指摘。医療分野では形式の異なる電子カルテの統合などでAIが貢献できるとした。

さらに、中国、韓国、タイ、インドネシアなどアジア各国の言語で使えるAIを開発し、アジア市場から世界に展開していく可能性を指摘した。国内では、今年は地方や中小企業でもAIの活用が広がることに期待したいと話した。

将来的に人類の知能に匹敵する汎用AIが登場すれば、核物質が国際原子力機関（IAEA）で管理されているように、AIにも国際的な管理体制が必要になる可能性があるとの見方も示した。

読売新聞社編集委員　三井　誠

「働く人材クライシス」⑤

竹増　貞信

ローソン代表取締役社長

3月15日

利益の適正配分で店舗維持

暮らしに身近なコンビニエンスストアは、今や小売業を代表する業態に成長した。24時間・365日の営業スタイルは、店舗に社会インフラとしての自覚を促す。消費者に親しまれているだけに、その経営は移ろいやすいニーズへの即応が迫られ、社会的な課題をいち早く克服していくことも求められる。

ローソンの竹増貞信社長は、いっとき業界で問題化したコンビニ本部と加盟店の軋轢（あつれき）を重くみて、本部が加盟店の利益に責任を持つ経営を2020年度から実践している。「しっかりと加盟店さんにも利益を取っていただく仕組みが欠けていたから、満足な雇用ができず、店の運営が難しくなっているのではないか」。そう語る竹増氏の問題意識からは、企業利益の確保と持続的な経営の均衡を図ることの難しさがうかがえた。

コロナ禍で顧客の嗜好（しこう）が変化したことを踏まえ、ローソンは冷凍食品や総菜を開発して品ぞろえを改め、さらにはIT技術を駆使して店舗から最短15分で顧客に商品を届けるサービスも始めるという。アジア諸国で展開する店舗も含めて「必要不可欠なプラットフォーム（基盤）、アジアのGAFAになろうじゃないか」という竹増氏の構えは野心的に映った。

IT技術を取り込むことを一つの狙いとして、ローソンは親会社の三菱商事とともにKDDIと資本業務提携を結んだ。ローソンは三菱商事とKDDIの折半出資となり、上場は廃止される方向だ。加盟店利益に責任を持つ経営を株主2社が尊重しつづけるかどうかが興味深い。

物流の担い手不足への対応としては、弁当や麺類、総菜、サンドイッチといった商品の配送を1日3回から2回に減らし、1拠点あたりのCO_2（二酸化炭素）排出量を25％削減する効果を見込む。こうした取り組みを経営トップが発信していくことが求められる時代なのだろう。

読売新聞社経済部長　小野田　徹史

「中国で何が起きているのか」⑩

柯　隆　東京財団政策研究所 主席研究員

3月18日

発展の速さ 制度置き去り

今春の中国の全人代（国会に相当）は、不動産不況と地方政府の隠れ債務といった難題に中国政府がどのような対策を打ち出すか注目された。

柯隆氏は「何もサプライズがなかった」とし、経済は「失速しつつある」との見立てを披露。その根本原因は「この間の速すぎた発展に（経済体制面などの）制度づくりが追いついていないことがある」と指摘した。

全人代では李強首相の会見が中止され、海外メディアから「政治の透明性が損なわれる」との不満が出た。柯隆氏は「首相会見はマーケットへのメッセージになってきたが、それが無いことで今年のビジネスは難しくなる」と経済面への影響にも言及。また今年の成長率目標が5％前後となった点については、「昨年は5・2％成長を達成と発表されたが、本当だろうか」と提起。「高くて1・5％」との米シンクタンクの推計値を紹介しつつ、投資・消費・輸出の伸びが勢いを欠いた状況から「どちらが体感温度に近いだろうか」と問いかけた。

また習近平政権10年余の歩みを振り返り、2013年発足当時は「供給過剰」が問題で、過剰生産能力を対外移転する「一帯一路」が打ち出されたが、現状は「需要不足」が問題で、コロナ禍に加えて「厳しい締め付けによる民営企業の弱体化が背景にある」と分析した。

会見は日中関係に関して「おやっ」と思える発言で締めくくられた。

東京・銀座に北京から若手の知識人らに支持される書店が進出したことを紹介。書籍販売だけでなく多彩な交流イベントも開催する新しいタイプの店舗空間で、すでにパリ、ロンドン、ベルリンなどにも進出し、シンガポールをハブに「グレーター・チャイナ・ネットワーク」が形成されていると指摘。「こうした動きはヒト・カネ・情報という面で中国と日本を結ぶ新しいネットワークになる可能性がある」と期待感を込めて語った。

朝日新聞出身　加藤　千洋

田村　智子　日本共産党委員長

3月19日

「変革」と「不変」が相伴

女性初の党首となる田村智子委員長に、23年ぶりの党首交代を果たした共産党。100年超の歴史を持つ「老舗政党」の鮮烈人事の余波が残る中での記者会見となったが、党の「変革」と「不変」が相伴するものとなった。

自民党派閥の政治資金パーティー裏金事件で今後の政局の行方が混迷する中、田村氏は「私の責務は必ず自民党政治を終わらせることだ」と強調。①経済再生②憲法9条を生かした政治③ジェンダー平等の実現を掲げ、自らの「自民党打破宣言」とした。

故安倍晋三元首相の「桜を見る会」前夜祭の追及で名をはせた論客でありながら、「タムトモ」の愛称で親しまれる田村氏。選択的夫婦別姓の必要性を訴える姿には説得力があり、党刷新への期待が集まるのは当然だ。

専ら質問は昨年来、物議を醸してきた、党内での分派活動を認めないとする組織原則「民主集中制」のありように集中した。

田村氏は「多数決で決めたことはみんなで実行する。国民に責任を負う以上、そうしなければバラバラな党になる」と説明。「私たちの改革には抵抗が多い。団結が必要だ」とも語り、方針を堅持することへの理解を求めた。

過去に国家権力から厳しい弾圧を受けたり、党内で激しい路線争いをしたりした歴史を持つが故に、ことさら「一枚岩」を重視することは理解できる。また、田村氏の説明にも大きな論理的破たんはない。

ただ、党は現在、民主的な選挙を通じた「多数者革命」を目指すとの立場だ。国民の半数が無党派層となる中、内向きになり過ぎるよりも、外に目を向けることは党勢拡大にも資するはずだ。いたずらに「反共攻撃」の材料として利用されないためにも、「革命政党」の「変革」も求められる時代なのではないかと感じた。

時事通信社政治部　丸橋　博之

「〈政治とカネ〉を問う」⑥

久米　晃

元自民党本部事務局長

3月22日

選挙はカネがかかるもの

「全部、反故になっている」。現在の政治資金問題の原因は、自民党がリクルート事件を踏まえて1989年につくった政治改革大綱をないがしろにしたことにあるという。「派閥の弊害を除去するため、（政治資金）パーティーはやらない。党役員は派閥を抜けなくちゃダメですよ、と書いてある」

岸田文雄氏が閣僚在任中にパーティーを開き、派閥会長のままで総理に就いたことを例に挙げ、「党の緩みがこういうところから出ている」と指摘した。背景にあるのは、一強多弱の政治状況がもたらす「絶対に政権交代はない」という自民党のおごりであり、「関係者の処分をよっぽど厳しくしないと支持率は回復しない」との見立てを示した。

ただ、政治資金を丸ごと批判する現在の風潮には強く反論した。自民党が全国に張り巡らす地方組織を企業の営業所になぞらえ、その維持には「当然の営業経費」が必要であり、「ポスターを貼れば日当もかかるし、ビラ代もかかるし、座談会をやれば会場の経費もかかる」「買収資金でなく、最低限の活動資金」と説明した。

面積が大きな選挙区では「後援会事務所を3カ所、4カ所」「移動するにもガソリン代がかかる」「何でもかんでも一律に同じにやれというのがどだい無理な話」などの事情にも触れ、「選挙はカネがかかるものなんだと理解して、政治とカネの問題を話してもらいたい」と訴えた。

メインテーマは「政治とカネ」だったが、そこは〝選挙の神様〟である。「昔は票読みができる選挙のプロがいて、その確認のため世論調査をした。今は読めるプロがいなくなり、世論調査で票読みをする。主客転倒だ」などの興味深い話が続々。衆院選の時期は「（岸田総理の）やけっぱち解散なんてない。選挙は勝つためにやるのだから」とのご託宣だった。

日本経済新聞社編集委員　大石　格

府中刑務所 視察

受刑者「さん」付け戸惑いも

2月22日／参加者27人

2月、日本記者クラブの視察団として、東京都府中市にある国内最大の刑務所「府中刑務所」を訪れた。20万平方メートル超の広大な敷地を高さ5メートル超の塀が囲む。建物は想像していたよりも古い印象。空調が十分効いていないのか、「施設内の温度は屋外とあまり変わらない」と説明された通り、肌寒さを感じた。

犯罪傾向が進んだ刑期10年未満の男性を中心に収容し、定員2668人に対する収容率は現在約60％。居室で黙々と折り紙を折る人、入浴の順番を待って整列する人、懲罰を受けて正座している人…。視察では刑務所内の日常が垣間見えた。

一般社会と同様に刑務所内も高齢化し、知的障害や発達障害のある人も増えている。施設では自転車型トレーニング器具を使ったリハビリやタブレットによる脳トレを導入。高齢の受刑者が作業療法士や介護士に付き添われてトレーニングに励む姿は介護施設と何ら変わらなかった。

名古屋刑務所で刑務官が受刑者に暴行や暴言を繰り返していた問題を受け、法務省は再発防止の一環で、受刑者の呼び捨てをやめて「さん」付け呼称にする取り組みを4月から全面的に始める。府中刑務所では昨年12月から一部試行している。

リハビリ担当や居室担当の刑務官は違和感なく「さん」付けで呼んでいるという。一方、大人数を管理する作業工場担当の刑務官には「規則違反を注意する際もさん付けなのか」と戸惑いもあるようだ。施設内を案内した処遇部長は「正直、刑務所では厳しい管理が必要だと考える職員も中にはいる」と明かした。

府中刑務所は地元自治体など外部からの見学を積極的に受け入れているという。今回の視察にも誠意を持って対応してくれたように感じた。受刑者のスムーズな社会復帰や不祥事防止のためにも、刑務所という施設が地域に開かれた存在であってほしいと思った。

熊本日日新聞社地域報道本部社会担当　丸山　伸太郎

政治倫理審査会

首相の「賭け」なお正念場
処分と規正法改正が分水嶺

足利　浩一郎（読売新聞社政治部デスク）

岸田文雄首相（自民党総裁）が自民党派閥の政治資金規正法違反事件を巡り、衆院政治倫理審査会に全面公開で出席する意向を唐突に表明したのは2月28日のことだった。

「国民の政治不信がますます高まってしまう。状況を打開しなければいけなかった」

首相がその日、周囲に漏らした言葉の端々にこれまでにない切迫を感じた。政府・与党の関係者には表明直前まで知らされず、麻生太郎副総裁ら幹部も例外ではなかった。

衆院政治倫理審査会で答弁する岸田文雄首相
（2月29日/国会/読売新聞社提供）

与野党は衆院政倫審で安倍、二階両派の幹部5人を審査することでいったん合意したが、公開する、しないという開催形式の入り口で協議が難航した。その余波で2024年度予算案の審議も停滞し、年度内成立が確実となる3月2日の衆院通過期限が迫っていた。

首相が範を示す形となって5人は野党が要求する全面公開に応じざるを得なくなり、衆院政倫審は開催された。ある政府高官は予算案が3月2日に衆院通過した意義を強調し、「政権が立ちゆかなくなるところだった」と安堵した表情を浮かべた。

当事者意識を欠いた答弁

首相は大きな「賭け」に打って出たわけだが、成功したとは必ずしも言い切れない。首相を含む6人の答弁は当事者意識に欠ける答弁が目立ち、取材していた記者団からいらだちの声も上がった。

国民から特に厳しい視線を向けられているのは安倍派だ。同派では、派閥の政治資金パーティー収入を所属議員に還流し、18～22年の5年間に計約6億7500万円を裏金化していたとされる。22年4月に当時会長だった安倍晋三元首相が還流を中止するよう指示したにもかかわらず、還流が継続された経緯について、真相は闇に包まれている。

西村康稔・前経済産業相は衆院政倫審で、安倍氏が死去した後の22年8月に幹部間で継続の是非を協議したことは認めつつ、「結論が出なかった」と主張。世耕弘成・前参院幹事長にいたっては、3月14日の参院政倫審で「誰が決めたか私も知りたい」と居直った。当時幹部だったのであれば主体的に調査し、なぜ真相を明らかにしようとしないのか。そのような疑問を抱いた国民は少なくないだろう。臆面もなく、人ごとのような発言をする姿を見て首をかしげざるを得なかった。

実態解明に至らぬ歯がゆさ

政倫審で関係議員の追及を重ねても、「知らない」「秘書に任せていた」といった答弁が繰り返され、実態解明につながらないことは想像に難くない。立憲民主党や日本維新の会などの野党は、安倍派元幹部らを対象として、虚偽の証言をすれば偽証罪に問われる証人喚問を要求している。

公明党幹部は「政倫審には限界がある。政倫審の答弁内容も踏まえ、処分の軽重を判断するしかない」と指摘する。歯がゆさは感じるが、次のステップに進まざるを得ないのかもしれない。

首相は政治資金収支報告書の不記載額や役職なども勘案し、4月上旬までに関係した議員の処分を行いたい考えだ。国会議員本人への罰則を強化する政治資金規正法の改正に関しては、今国会中に実現する意向を示している。

首相が一連の問題に政党としてのけじめをつけ、政治の信頼回復に向けた道筋を示せるかどうか。国民は指導力を注視している。

内閣支持率が20％台に低迷する中、9月には任期満了に伴う党総裁選が控える。再選を期す首相にとって、今後を左右する分水嶺を迎えている。

（3月22日記）

あしかが・こういちろう▼2002年入社　金沢支局　世論調査部を経て
年から政治部　法務部などを経て　2408
年3月から政治部デスク

日経平均が最高値更新

けん引役は海外投資家

急上昇 市場関係者も驚き

伊藤　一馬（時事通信社経済部）

2023年大納会の終値が3万3464円17銭だった日経平均株価は、24年に入り急ピッチで上昇した。2月22日にはバブル経済のさなかの1989年末に付けた最高値3万8915円87銭を34年2カ月ぶりに更新した。3月4日には節目の4万円も超えた。

4万円突破は「FAST」

日経平均上昇のけん引役は、投資主体では海外投資家、銘柄では人工知能（AI）に関連した半導体関連株などの値がさ株だった。みずほ証券の中村克彦マーケットストラテジストは「日経平均4万円への上昇はFASTだった。すなわちファーストリティリング（F）、アドバンテスト（A）、ソフトバンクグループ（S）、東京エレクトロン（T）だ」とたとえている。

日経平均の上昇は上場企業の業績向上が主因だが、東京証券取引所が上場企業に資本効率や株価を意識した経営を要請したことも大きかった。23年前半は東証の要請に加え、米著名投資家ウォーレン・バフェット氏による日本株の追加投資検討の表明も手掛かりとなり、日経平均は3万3000円台に浮上した。

23年後半は3万円台から3万3000円台の間でもみ合った。この時期は市場関係者の間で「海外機関投資家が大挙して来日し、日本株に関する調査をした」（中堅証券幹部）ことが話題になった。24年初頭の株価上昇は、こうした海外投資家の日本株保有比率引き上げが理由とみられている。東証の公表資料によると、海外投資家は年初から7週連続で日本の現物株を買い越した。

株式市場を分析する証券会社や資産運用会社のストラテジストでは「これほど速く日経平均が上昇するとは思わなかった」と驚いている人が多い。23年12月28日配信の「時事フォーキャスト調査」によると、24年に日経平均の高値が4万円を超えると予想した市場関係者は、回答者16人のうち2人だった。

4万円台を記録した日経平均株価を示すモニター
（3月4日午前/東京都千代田区/時事通信社提供）

相場上昇をけん引した半導体関連株の人気過熱については、地政学リスクの高まりが背景にあると指摘する声もある。米中両国の技術覇権競争によりサプライチェーン再構築の必要性が意識されており、半導体の製造装置や材料を扱う日本企業に対する注目度が高まった。

なお、89年12月時点の旧東証1部市場の時価総額は590兆円だった。一方、現在の東証プライム市場の時価総額は約980兆円に達している（3月27日現在）。日経平均が株価指数という物差しの一つでしかない点は留意するべきだろう。

日経平均の最高値更新を伝える記事では「株価は高くても景気は良くなっていない」という街の声がよく取り上げられた。株式市場担当の記者としては、やや違和感があった。「景気が良いから株価が上がる」のではなく、「株価が上がると資産効果により株式保有者の景気が良くなる」というのが筋だ。

株高や配当 限られる恩恵

日本証券業協会がまとめた資料によると、22年度末の個人株主数は1489万人。最近は増加傾向が続いているが、日本の総人口（約1億2400万人）と比べると、株高や配当の恩恵を直接受けられる人は依然として限られている。

戦後の財閥解体では、財閥が保有していた株式を個人が取得することを推奨する証券民主化運動が進んだ。70年以上が経過した今も、この運動の趣旨は色あせていないのではないか。新しい少額投資非課税制度（NISA）などを通じ、企業価値向上の恩恵が家計に還元される仕組みが広がる必要がある。

いとう・かずま▼1994年入社　東証の兜クラブ　津　青森の両支局　日銀機械　郵政　素材　流通などを担当　2018年から3度目の兜クラブ　今年4月から「金融財政ビジネス」編集長

新・列島報告79　熊本県
ＴＳＭＣ新工場開所

県内波及効果10兆円超

渋滞、地下水への心配も

山本　文子
（熊本日日新聞社地域報道本部）

半導体受託生産最大手の台湾積体電路製造（ＴＳＭＣ）が２月24日、熊本県菊陽町に建設した日本国内で初めてとなる工場で開いた開所式。出席したＴＳＭＣ創業者の張忠謀（モリス・チャン）氏はあいさつで「半導体製造における日本のルネサンス（再興）になると信じている」と開所にあたっての思いを語り、熊本工場への期待を強く感じた。

開所式には、熊本工場を運営するＴＳＭＣの子会社ＪＡＳＭに出資するソニーグループの吉田憲一郎会長やデンソーの林新之助社長のほか、新たに資本参加を表明したトヨタ自動車の豊田章男会長も出席。ＴＳＭＣが２０２１年11月に新工場の建設を発表してから約２年３カ月。戦略物資として世界各国で半導体の重要性が高まる中、生産基盤強化に向けた国家プロジェクトがいよいよ本格的に動き始めるのだと実感した。

開所式を開いたＴＳＭＣの新工場（２月24日/熊本県菊陽町/熊本日日新聞社提供）

■政府補助 最大１・２兆円

新工場は今年10～12月に量産を始める予定で、スマートフォンの画像センサーや自動車向けに、日本では最先端となる回路線幅10～20ナノメートル台（ナノは10億分の１）台の演算用ロジック半導体を生産する。ＴＳＭＣは２月上旬、熊本県内に第２工場を建設することも発表。第１工場の隣接地とみられ、第１工場より先端の回路線幅６ナノメートルの製品も生産する計画だ。二つの工場を合わせた投資額は約３兆円を超える見通しで、日本政府は両工場に最大で計約１兆２千億円を補助する。官民挙げたプロジェクトに、地元への経済波及が期待されている。

半導体産業が集積する九州は「シリコンアイランド」と呼ばれる。熊本県内では、１９６７年に三菱電機が熊本工場の操業を始めて以降、ルネサスエレクトロニクスやソニーグループといった大手半導体メーカーのほか、東京エレクトロンなど製造装置メーカーが進出。最盛期の２０００年には九州の集積回路（ＩＣ）の生産額は約１兆４千億円に達したが、その後は他国の台頭に押されて低下傾向が続いた。

ＴＳＭＣの進出発表以降は、半導体関連企業が相次いで県内での設備投資を発表。ソニーグループは既存工場近くに、新工場建設に向けて27ヘクタールの土地を新たに取得。半導体製造用材料を手がける企業や物流企業の新増設のほか、ＴＳＭＣのサプライヤーである台湾企業の進出も増えている。自動車関連などの地場製造企業の中には、新たに半導体関連事業に乗り出す動きもみられる。

九州経済調査協会（福岡市）の推計によると、九州地域（沖縄、山口を含む９県）での半導体関連産業の設備投資による21年から30年までの経済波及効果は20兆７７０億円。このうち、熊本県が10兆５３６０億円を占めるとした。

■地価急上昇 営農にも不安

一方、インフラ整備や環境維持への対応も急務だ。半導体関連企業が集まるＴＳＭＣの新工場一帯では、朝夕の通勤時の交通渋滞が常態化。半導体工場は製造過程で大量の水を使うため、熊本が誇る地下水の減少や水質への影響を心配する声も根強い。ＴＳＭＣの新工場建設発表以降、菊陽町や近隣の市町では地価が急上昇。借地で自給飼料を生産する酪農家が土地の返還を求められるケースが増えており、農業者から営農継続への不安の声も上がっている。

熊本県は道路や工業用水などのインフラ整備にスピード感を持って取り組むと強調し、対応を急いでいる。地元への経済波及効果だけでなく、地域が抱える不安や課題もきめ細やかに取材していきたい。

やまもと・あやこ▼２０１６年入社　広告営業部や水俣芦北総局などを経て22年から現職

新・列島報告㊵　山梨県
県知事の政治資金不記載

取材条件 質問取り下げ

未来の報道 念頭に拒否

芹沢　年延
（テレビ山梨報道部県政担当キャップ）

「正気かよ」。電話を切った後にそうつぶやいていた。2月7日の朝である。

2月上旬に予定されていた報道各社による山梨県の長崎幸太郎知事、就任6年目のインタビュー。その直前の1月20日に長崎知事は、二階派から現金1182万円を受け取り、政治資金収支報告書に記載しないまま4年以上金庫に保管していたと明らかにした。「預り金だと思っていた」「確認を失念した」とのことだ。

「説明責任は果たした」と知事は言うが、とても納得できるものではない。調べるにつれて新たな疑問も浮かんでくる。事前に提出を求められた質問予定項目の文言を「政治とカネについて」から「自身の不記載問題について」に変更すると県に通告した。単独インタビューの場で独自に調べた疑問をぶつけるつもりだった。

不記載問題について会見で説明する長崎幸太郎知事。左は収支報告書、現金のイメージ（1月20日/テレビ山梨提供）

2月7日に県の担当者から「不記載に関する質問を削除してもらいたい」「すでに定例会見で答えていて、それ以上の答えはない」、そして「削除してもらえなければインタビューに応じられなくなる」と告げられた。「インタビュー自体できないってことですか？」と私は確認したが「そういうことです」という答えだった。

上司とも相談した後、私は県の担当者に対し、「本当に質問を削除しなければインタビューできなくなるのか」を再度確認したうえで、「応じることはできません」と告げた。担当者が「上のもの」と相談してから出してきた答えは「そういうことであれば知事のインタビューはなしということで」であった。

■100回でも同じ回答に

この問題が大きな広がりを見せる間、私は何度も「これでよかったのか」と自問した。しかし、いかなる理由をつけようともやはり「不記載の質問をしないでくれ」「はい、わかりました」とは言えない。それは100回同じ場面が来ても、100回そう答えるだろう。県で最も権力を持ち、巨額の予算執行の責任者である知事が、その資質を備えているのかは常に問わなければならない。

私が最も重要だと思ったのは、「未来の報道に対する責任を果たす」ということである。もしも県からの圧力に屈し、目先の不利益を考えて穏便にすませようとこの要請を受けてしまったら、将来自分に代わり県政を取材する後輩たちにあしき前例を作ってしまうことになる。「あなたたちの先輩はこの要請を受けてくれていますよ」と利用されかねない。政治も報道も、未来に対してかせを負わせることをしてはならないと考える。

■「サービス」と「真剣勝負」

知事は議会の中で今回のインタビューについて「サービスのようなもの」と言った。

私は「真剣勝負」のつもりで準備を進めていた。断じてサービスの手伝いをするつもりも、出来レースの八百長をするつもりもなかった。県側は今回の問題について当初「調整したにすぎず、認識の行き違い」と回答した。再抗議を受けて「深く反省申し上げる」としたが、県民に届けるインタビューに対する認識に、そもそもずれがあったことが最もさみしい。

先日ドラマの原作改変についての記事を見ている中で「当たり前に守られる権利を、守ってもらいたいと言うことに勇気が必要であってはならない」という言葉を見つけた。

我々は当たり前のことをしたに過ぎない。そうすることに勇気が必要ではない報道の未来を期待したい。

せりざわ・としのぶ▼2005年1月入社　報道部所属でスポーツ　社会部などを担当　15年より約2年半の制作部勤務を除き県政キャップ

私が会ったあの人

祖母をあやめた21歳のケアラー
心を寄せる手紙を励みに

春増　翔太（毎日新聞社）

支局に電話がかかってきたのは、月に何度かある夜勤の時だった。受話器を取ると、電話主の女性は小さな声で自分の名を告げた。神戸支局にいた2020年の秋。その声を、私は法廷でしか聞いたことがなかった。2カ月前、彼女が問われた罪状は、殺人だった。

これからつづるのは、その女性のことだ。今は社会の中で日々を歩んでいる。

2019年10月、21歳だった彼女は祖母をあやめた。その年の4月、念願の幼稚園教諭として働き始め、5月からは認知症の祖母と同居して介護も担っていた。仕事と介護で睡眠は2時間ほど。親族と職場の理解はなく、負担と苦悩を抱え込んだ。

ある日の未明、目を覚ました祖母に起こされ、いつものようにのしられた。「あんたがおるから、生きていても楽しくない」。昔から気性が荒く、認知症が進んだ祖母の非難は止まらなかった。

「もう…やめて」。それが5カ月で迎えた限界だった。裁判で、彼女は自らの罪に泣き、悔いた。

私は、そんな事件のあらましをほぼ傍聴だけで書いた。判決は執行猶予付の懲役刑だった。弁護士を通じて取材を打診したが、返答はなかった。記事は、匿名にした。

■「私も介護に苦しんだの」

報じた後、思ってもみなかったことが起きた。支局に連日、全国から手紙が何十通も届き始めた。全て、宛先は彼女だった。

「私も介護に苦しんだの」「大変だったね」「これからは自分のために生きてください」

そんな手紙を毎週末に弁護士事務所へ届けに行くのが私の役割になった。本人から電話があったのは、手紙がようやく数を減らした頃だ。用件は「お礼」だった。

「頂いた手紙は全部読んでいます。私を気にかけてくれる人がこんなにいて、励みにしています」

礼を言いたかった相手は、私よりむしろ、匿名の差出人たちだったと思う。記事を書いただけの私は決まりが悪く、何かをモゴモゴと口にして受話器を置いた。

■ラインで嬉しい報告が

本当は、嬉しかった。

礼を言われたこと以上に、彼女に心を寄せた人たちがいたことが。それを彼女自身が前向きに受け取っていたことが。罪を犯した匿名の誰かの境遇を知り、共感を持って言葉を贈る人たちの存在は、私にとっても励みになった。

後に私は彼女とじっくり話をすることができるようになった。きっかけは、あの電話だったと思う。そして、つい先日、彼女からラインで嬉しい報告があった。

「正職員として、保育の仕事に就くことになりました」

事件で失っていた幼稚園教諭の資格が戻り、自分でその職場を探したそうだ。

資格が戻っても実際に働き口を見つけるのは勇気が要っただろう。いずれ、執行猶予の期間は明ける。でも、彼女はそれで償いが終わるとは思っていない。2年前の冬、言っていた。

「私がいつか子どもと携わる仕事に戻れても、それを快く思わない人はいるかもしれない。それは、私が一生背負っていくことです」

確かに過ちを犯した。でも、私は願わずにいられない。やり直しの道を行く彼女に、彼女だったかもしれない人たちに心を砕く世の中であってほしいと。いつか、今度は、その名とともに彼女の話を届けられるように。

（はるまし・しょうた　2009年入社　社会部　神戸支局などを経て21年から再び社会部所属）

境遇を知った人が送ってくれたクマのぬいぐるみを手にする女性。「一つ一つの贈り物に励まされた」と言う（2021年12月／神戸市内／筆者撮影／毎日新聞社提供）

次号は市川正峻さん（TBSテレビ）にバトンが渡ります。

「やっぱり、戦争は嫌いだ」
――大岡昇平と福田恆存

小山（こやま）　鉄郎（てつろう）
1949年群馬県生まれ　73年共同通信社入社　川崎　横浜支局　社会部を経て　84年から文化部で文芸欄　生活欄を担当　現在　同社編集委員　2013年度日本記者クラブ賞を受賞
著書に『白川静さんに学ぶ 漢字は楽しい』『あのとき、文学があった―「文学者追跡」完全版』『大変を生きる―日本の災害と文学』『村上春樹クロニクル』など

１９８８（昭和63）年12月27日。２日前に79歳で亡くなった作家、大岡昇平さんのお別れ会があった。大岡さんの遺志で葬儀・告別式はなかったが、大岡さんの死を悼む人たちが「どうしてもお見送りを」ということになって、一般に公表はせずに、東京・成城の自宅で午後２時からお別れ会が行われたのだ。

大岡邸の庭に面したサンルームに設けられた祭壇へ献花を済ませた後、参列者たちは玄関側に回って家を遠巻きに囲むように並んでいた。私の近くに秋山駿、丸谷才一、中野孝次…、少し離れたところには加藤典洋、佐々木幹郎、そして大江健三郎の各氏ら日頃、大岡さんを敬愛する文学関係者約１５０人が出棺の時を静かに待っていた。それは昭和天皇が亡くなる直前のことだった。

真冬の曇天の本当に寒い、底冷えの日で、私はときどき体を動かしながら寒さにたえていた。その時、背後から私のコートを引っ張る人がいた。振り返ると福田恆存さんだった。

◆あっちで話そう

私は会釈をした後、「大丈夫ですか」と聞いた。福田さんは７年前に脳梗塞で倒れたことがあり、この日の寒さが心配だった。厚手のコートを着ていた福田さんは「うん、大丈夫だよ」と言った。さらに「君は大岡（作品）が好きなの？」と尋ねてきた。私が好きな大岡作品について話すと、福田さんが少し離れた方を指して「あっちの方に行って話そう」と言う。私は、従って歩みながら、大岡さんのお別れ会に福田さんが姿を見せたことに、驚いていた。

福田さんは日本を代表する右派の論客として、『平和論にたいする疑問』などの論で〝進歩的文化人〟たちに冷水を浴びせてきた人。『私の國語教室』で旧仮名の合理性を述べ、新仮名表記の矛盾を詳細に指摘して戦後の国語改革と闘った人である。

一方、大岡さんは『俘虜記』『野火』『レイテ戦記』などの作品で知られ、一貫して戦争に反対してきた左派の代表的な存在だった。右派の頭目のような福田さんが、左派のこれまた頭目のような大岡さんのお別れ会に来ているのだ。かつて文学者の集まり「鉢の木会」で２人が一緒だったことは知っていた。だがその後の２人の交友を知らなかったので、思わず「大岡さんと親しかったんですか」と聞いてしまった。

◆世間には内緒で

それに対して福田さんは「僕らはいいんだが、お互いの支持者がねぇ」と言った。「僕の支持者は何で大岡なんかと付き合うんだとうるさいし、大岡の支持者も何で福田なんかと付き合うのかとうるさいらしい」

そこまで話した後、福田さんは一瞬、間を置いて「だから、ある時から世間には内緒で会っていたんだ」と、ちゃめっ気のある笑顔を見せた。

「大岡が富士の山荘に行く途中か、または山荘をたたんで成城のこの家に戻る途中かに、夫婦で僕の大磯の家に泊まっていって、一晩話し込むことにしていたんだ」と言う。

「最後に会われたのは、いつですか」。そんな記者らしい質問を私はした。「今年の９月」と福田さん。

「大岡さんとの最後の言葉はなんですか」と、さらに質問を重ねた。

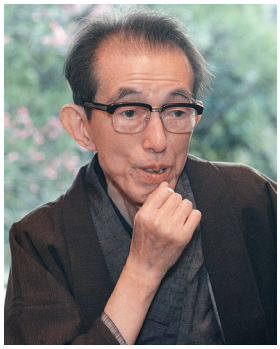
福田さんの目が少し遠くを見るようなものになって、「いゃー、大岡が帰る時、僕の家の玄関でちょっと

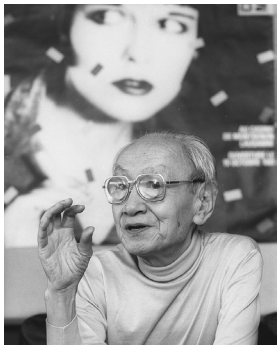
口論みたいになっちゃってねぇ。戦争のことで。『やっぱり、戦争は嫌いだ』と大岡が言って、勢いよく僕の家の玄関の戸をパーンと閉めて、帰っていったんだ」と言う。

神奈川県大磯町の福田邸は和風の建物。その玄関を勢いよく閉めて去っていく大岡夫妻…。そんな光景を頭に描いていると、続けて福田さんはこう加えたのだ。

「でも、最後の言葉が『やっぱり、戦争は嫌いだ』なんて、実に大岡らしいよね」

そう言って、福田さんは破顔一笑。まるで少年が本当に楽しい時に見せるような満面の笑みで立っていた。





左 福田恆存さん（1987年２月/神奈川県大磯町の福田氏の自宅）
右 大岡昇平さん（1986年５月/東京・成城の大岡氏の自宅）
小山鉄郎氏の写真含め全て共同通信社提供

歯に衣着せぬ発言で知られた大岡昇平、福田恆存という左右の代表的な論客。もちろん対立する時もあっただろうが、でも2人は互いに認め合う親友同士だったのだ。

そのことへの驚きが、私の中で今も続いている。私たちは、いや私は、互いの考えが異なっていても、それを堂々と述べ合い、かつ互いに認め合う親友を持っているだろうか…。

◆まじめな人は

大岡さんは1971（昭和46）年に日本芸術院会員に選ばれるが「過去に捕虜の経験があるので、国家的な栄誉を受ける気持ちにはなれない」として辞退し、大きな話題となった。そして昭和天皇が重い病に倒れた後、もし亡くなった時の企画として「インタビュー・私の昭和」というシリーズを考えて、取材のお願いの電話を大岡さんに私はした。

でも大岡さんは既に数紙の取材を受けていて〝自分としての思いは十分話した〟というような返事を繰り返した。あまりしつこいのもよくない。最後のお願いだと思い、「ご存じのように、共同通信の文化部の記事は主に地方紙に掲載されます。各地方紙にも大岡さんの読者はいると思います。広島にも長崎にも沖縄にも」と述べた。すると「…やりましょうか…」と大岡さんは言って、その取材を受けてくれたのだ。

「まじめで勇敢な人はいて、そういう人はみんな死んだ」。自分の戦争体験を話す大岡さんの目は潤んでいた。この取材から、わずか3カ月後の大岡さんの死だった。

そして福田さんが私のコートを引っ張ったのは、前年刊行の『福田恆存全集』で私が長時間のインタビューをして、その後も何度か話す機会があったこと。さらに、もし天皇が亡くなった時、「昭和という時代」についての執筆依頼を電話でしたことがあったからだと思う。

その電話に「書くのを約束している新聞があるから」と福田さんは言う。でも簡単には諦めたくなかった。

「人は時代やおのおのの制約の中で生きざるを得ない。そんな宿命をしっかり自覚して生き、自立することが人間というものの姿なのだ。そう福田さんはおっしゃっているのではないですか。福田さんが生きた『昭和という時代』を読んでみたい」と私が話すと、「そう君に言われたら…」と言って、電話の向こうで福田さんが諾否を考えているような時間があった。しばらくして「でも、やっぱりやめよう。約束しているのだから」と福田さんは言った。福田さんらしい明快な答えだった。

◆最後のお別れを

「福田さーん、福田さーん」。大岡さんのお別れ会の時、福田さんと私が話していると、そんな女性の細い声が聞こえてきて、それに向かって福田さんが手を挙げた。その声の人が近づいてきて、「福田さん、最後のお別れを」と言った。

福田さんは黙ってうなずいた。その時、大岡邸の前には多くの文学者がいた。もちろん既に大岡さんと、お別れを済ませている人も多かったと思うし、大岡邸内にも文学者がいたかとも思うが、大岡さんの棺を閉ざすにあたって、福田さんが最後のお別れに呼び込まれたのだった。

福田さんが大岡邸の玄関の方へ向かって歩いていく。私はその姿が大岡邸の玄関の中に消えていくまで、じっと見ていた。

その時から、11日後に「昭和という時代」が終焉した。「これは最後まで現役の作家だった大岡さんの、新しい時代への遺言だった」。そう私は記して、大岡昇平さんへのインタビュー記事を即時に配信した。

そして福田恆存さんも大岡さんの死から6年後、82歳で亡くなった。

会員異動（2023年4月～2024年3月）

会員種別／月	プレス会員 法人（社）	基本（人）	個人A（人）	個人B（人）	個人C（人）	個人D（人）	名誉・功労（人）	法人・個人賛助会員（社）	（人）	特別賛助会員（人）	学生会員（人）	全会員 合計（社）	（人）	対前月増減（社）	（人）
2023.4	126	715	210	52	43	760	13	55	120	92	20	181	2025	−1	−46
5	126	717	211	52	44	761	13	54	118	92	20	180	2028	−1	3
6	126	716	213	53	45	759	13	53	117	92	41	179	2049	−1	21
7	126	720	215	52	43	760	13	53	117	93	42	179	2055	0	6
8	126	716	215	52	37	758	13	53	117	93	47	179	2048	0	−7
9	126	716	216	51	37	761	13	53	117	93	47	179	2051	0	3
10	126	716	216	50	37	761	13	53	117	93	47	179	2050	0	−1
11	127	720	216	50	37	753	13	53	115	94	47	180	2045	1	−5
12	127	720	216	50	36	752	13	53	115	94	47	180	2043	0	−2
2024.1	127	720	215	50	36	746	12	53	115	94	47	180	2035	0	−8
2	127	719	214	50	36	745	12	53	115	95	47	180	2033	0	−2
3	127	718	214	50	35	749	12	53	115	95	53	180	2041	0	8

■会議報告

●第103回臨時社員総会

（3・26　会見場）

書面議決社員を含め出席社員計112社の出席をもって成立（定数64社）、定款第25条の定めに従い前田浩智理事長を議長に議事を進めた。

2023年度補正予算案と24年度事業計画および予算案を議決した（2ページ、17ページ参照）。

昨年5月の定時社員総会以降届け出のあった役員の一部交代を承認した。

●第139回総務委員会

（3・5　小会議室）

2024年度事業計画・同予算案を作成したほか、貸室料改定案および総会の議事日程案を理事会に上程した。

出席　角田委員長、藤井、榊原、林、米田、内藤の各委員、前田理事長、沢井副理事長、江木専務理事。

●第708回理事会

（3・5　会見場）

①2024年度事業計画・予算案を原案通り承認、臨時社員総会に上程することにした。経常収益（収入）は3億4071万4900円、経常費用（支出）は3億5706万5000円で1650万円の赤字予算で、減価償却費350万円を計上し、当期一般正味財産は1985万1000円減少している（2ページ参照）。

②貸室料金を改定することを議決した。

日本プレスセンタービルの共益費の値上げ、会員用和食レストランの運営を任せているレストラン・アラスカとの飲食売上割戻金などの見直しにより、貸室料の値上げが必要になったためである。近隣の同規模の貸室料金、前回の料金改定から10年以上が経過していることを考慮し、10月1日から10階ABCホール、9階会見場、大会議室、小会議室の貸室料金を10％値上げすることを決めた。

③第103回臨時社員総会を3月26日に、第104回定時社員総会を5月31日に開催することを決定した。

出席　前田理事長、沢井副理事長、江木専務理事、角田、藤井、榊原、藤野、惣田、鎌田、齋田、吉原、曽山、西、米田、内藤、瀬尾、林、神田の各理事。

●日本記者クラブ賞・同特別賞推薦委員会

（3・1　大会議室）

1月末までに推薦のあった候補について意見を付して、選考委員会（4月10日開催）に報告することにした。

出席　今井委員長、内城、北村、実、鈴木、町田の各委員。

●第451回会報委員会

（3・4　大会議室）

3月で退任する大石卓見委員（秋田魁新報）のあいさつの後、4月号の編集について協議した。

出席　榊原委員長、志賀、水野、大石、佐藤、萩原、勝田、本橋、稲澤、倉重、二村の各委員。

●第559回会員資格委員会

（3・13　ゴールドルーム）

3月で退任する宮東治彦委員（日本経済新聞）のあいさつの後、4月1日付入退会を審議、理事会に答申した。

出席　前木委員長、早田、村尾、宮東、居石、今市、菊池、森安、古賀の各委員。

●第548回企画委員会

（3・12　会見場＆オンライン）

3月で退任する黒沢大陸（朝日新聞）、澤田信孝（北海道新聞）、岡山俊明（日刊スポーツ新聞）の3委員のあいさつ（澤田氏は事務局が代読）の後、今後のゲスト候補について意見交換した。

出席　藤井委員長、黒沢、佐藤、橋本、猪熊、大内、菅野、佐々木、森田、杉田、小林、中村、山口（哲）、岡山、伊藤、今井、出川、川戸、播摩、小栗、平井、野田、江川、倉澤、迫田の各委員。

2024年度　正味財産増減予算書(内訳表)

2024年4月1日から2025年3月31日まで

（単位：円）

科　目	公益目的事業会計					収益事業等会計	法人会計	合計
	公1 記者会見等	公2 クラブ賞	公3 会報・HP	共通	小計			
1．経常増減の部								
(1)経常収益								
特定資産運用益				1,169,300	1,169,300			1,169,300
受取会費				225,904,536	225,904,536		63,716,664	289,621,200
プレス会員会費収入				191,956,752	191,956,752		54,141,648	246,098,400
賛助会員会費収入				33,947,784	33,947,784		9,575,016	43,522,800
事業収益						49,816,000		49,816,000
貸室収入						33,342,000		33,342,000
飲食売上割戻金						10,804,000		10,804,000
施設機器賃借収入						5,670,000		5,670,000
雑収益						108,100	300	108,400
受取利息							300	300
その他の雑収入						108,100		108,100
経常収益計				227,073,836	227,073,836	49,924,100	63,716,964	340,714,900
(2)経常費用								
事業費	148,819,060	9,134,070	45,186,870	58,273,000	261,413,000	44,059,800		305,472,800
借室維持費	77,005,800			57,678,000	134,683,800	25,770,400		160,454,200
借室料	39,156,000			24,472,500	63,628,500	19,578,000		83,206,500
共益費	8,017,200			5,010,750	13,027,950	4,008,600		17,036,550
空調・光熱費	4,367,600			2,729,750	7,097,350	2,183,800		9,281,150
ホール専用利用費	25,465,000			25,465,000	50,930,000			50,930,000
人件費	55,525,200	6,447,400	25,555,800		87,528,400	16,819,400		104,347,800
役員報酬	6,375,000	1,275,000	5,100,000		12,750,000			12,750,000
給与金	30,514,300	3,107,800	12,016,200		45,638,300	10,898,700		56,537,000
賞与・諸手当	17,995,900	1,983,600	8,162,600		28,142,100	5,735,700		33,877,800
厚生費	640,000	81,000	277,000		998,000	185,000		1,183,000
事業費	16,288,060	2,686,670	19,631,070		38,605,800			38,605,800
会議費	1,528,800	58,800	372,400		1,960,000			1,960,000
事業運営費	12,864,540	494,790	3,133,670		16,493,000			16,493,000
会報発行・ＨＰ運営費			14,767,200		14,767,200			14,767,200
クラブ賞実施費		1,800,000			1,800,000			1,800,000
運営雑費	283,920	10,920	69,160		364,000			364,000
通信費	1,534,800	306,960	1,227,840		3,069,600			3,069,600
印刷費	64,000	12,800	51,200		128,000			128,000
交通費	12,000	2,400	9,600		24,000			24,000
減価償却費				595,000	595,000	1,470,000		2,065,000
管理費							55,092,200	55,092,200
借室維持費							19,327,800	19,327,800
借室料							14,683,500	14,683,500
共益費							3,006,450	3,006,450
空調・光熱費							1,637,850	1,637,850
人件費							13,885,200	13,885,200
役員報酬							2,250,000	2,250,000
給与金							7,107,000	7,107,000
賞与・諸手当							4,410,200	4,410,200
厚生費							118,000	118,000
その他の管理費							20,444,200	20,444,200
クラブ管理費							15,755,800	15,755,800
機器備品費							50,000	50,000
消耗品費							639,000	639,000
事務委託費							2,448,000	2,448,000
事務雑費							746,000	746,000
通信費							767,400	767,400
印刷費							32,000	32,000
交通費							6,000	6,000
減価償却費							1,435,000	1,435,000
予備費							0	0
経常費用計	148,819,060	9,134,070	45,186,870	58,273,000	261,413,000	44,059,800	55,092,200	360,565,000
評価損益等調整前当期経常増減額	△148,819,060	△9,134,070	△45,186,870	168,800,836	△34,339,164	5,864,300	8,624,764	△19,850,100
当期経常増減額	△148,819,060	△9,134,070	△45,186,870	168,800,836	△34,339,164	5,864,300	8,624,764	△19,850,100
2．経常外増減の部								
(1)経常外収益								
経常外収益計								
(2)経常外費用								
経常外費用計								
当期経常外増減額								
当期一般正味財産増減額	△148,819,060	△9,134,070	△45,186,870	168,800,836	△34,339,164	5,864,300	8,624,764	△19,850,100

IT編⑨ セキュリティ基礎講座

3・9／講師：松波功 中日スポーツ整理部／出席：ウェブ18人

どこにでも起こる問題

新人への研修担当者向けにネット使用上のセキュリティ講習を開催した。生成AIを利用して講師が作成した岸田首相らの音声や、ネット絡みの記者の不祥事など事例を紹介。「一人の不注意で会社の業務が止まる。どこにでも起こる問題として教える必要がある」と話した。（事務局）

調査報道⑩ 「記憶喪失になった病院」の舞台裏

3・16／講師：須藤龍也 朝日新聞社編集委員／出席：会場8人、ウェブ14人

誠意をもって対応

2022年10月にサイバー攻撃の被害を受けた大阪急性期・総合医療センター。病院側の全面協力の下378枚の写真と数十本の動画の提供を受け26人への取材で全11回の連載記事を執筆した。事実とデータによって客観性を維持することや、反省と教訓を織り込み、役に立つ記事にするため「都合の良い話だけでなく悪い話も書く」ことを意識したという。サイバー攻撃の問題は「数少ない、メディアで書き尽くされていない分野。記事自体が記録になるような連載を心掛けた」。連載が結実したことに「誠意をもって相手に接し、敬意をもって取材する。この一言に尽きる。取材の狙いを相手に説明して理解してもらった末に結び付いた」と振り返った。

メディアに対し「サイバー攻撃はテロ行為。甚大な被害が起きているのに記事の扱いにムラがありすぎる」と指摘。「フラットに記事が書ける状況を早く作らないと社会に情報が広がらないし、取材する障壁はどんどん上がっていく」と警鐘を鳴らした。（事務局）

土曜記者ゼミ

今年度も5月から リアル参加を

2024度の現役記者向け勉強会「土曜記者ゼミ」は5月から始めます。「IT講座」は毎月第2土曜日、「調査報道」は毎月第3土曜日に開催します。8月はお休みです。ぜひ会場での参加をお待ちしております。今まで通りリモート参加も継続します。開催通知は事前にお送りしていますので、左記のQRコードより登録ください。23年度に登録いただいていた方には継続して案内をお送りしますので再度登録いただく必要はございません。

お問い合わせは事務局・河野まで。（電話：03―3503―2764）

「IT講座」受講登録フォーム

「調査報道」受講登録フォーム

会報委員から

コシ派とイシ派

自民党の政治資金パーティーを巡って裏金問題の論戦が続いている。4月の第4日曜には衆院議員の欠員に伴う三つの補欠選挙があり、岸田政権の行方がかかる。

そんな折に「派閥」の話で申し訳ない。約20年前。当時、政治部で駆け出しの私は民主党副代表・小沢一郎議員の番記者として沖縄へ出張した。そこで魔女の一撃に遭う。1泊した宿泊先で朝食に行こうと、フロントの前を横切ったところで、だましだましだった腰がついにフリーズ。立ったまま身動きできず、声も絞り出せない。異変を察知したホテルマンが119番。生まれて初めてとなる担架に乗せられる瞬間から救急車内で隊員に何度か呼びかけられるまで激痛で気が遠のいた。そのまま沖縄の地で1週間の入院生活となった。

「君はイシ派でなく、コシ派だな」。復帰の日、それまで異色の存在と感じていた強面の先輩から親しげに声を掛けられた。「入院先に鍼灸師を呼んではりを打ってもらえば（一時）楽になって、すぐ退院できたのに」と。別の記者からは「秘伝」の腰痛予防体操を教えてもらい、取材先からはカリスマ鍼灸師を紹介された。治療に通うと複数の議員も施術を受けに来ていて取材の上でも輪が広がった。

ちなみにこのカリスマ。時の小泉純一郎首相の施術をしに公邸に通った。後に、その話をしてくれた時、思わず「小泉さんもコシですか」と問うと「彼は違ったね」。どうりで食い込めなかったわけだ。

出待ちで長時間立ち続け、夜討ち朝駆けで不摂生となりがちの政治記者で別の派と呼べるのは『イシ（胆石）』。激痛両派の掛け持ちもいる。

思い出したのは先日久しぶりに腰を痛めたからだ。自分なりの腰痛改善メソッドに取り組んでも、今回はどうしたわけか痛みが引かない。専門家に症状を言うと、座骨神経痛。持病にも加齢が押し寄せているのか。みなみなさま、くれぐれもご自愛を。

共同通信社くらし報道部長　水野　雅央

レストラン＊価格は全て税込みです

予約電話　和食 3503-2723　洋食 3503-2766・2731

和食　四月お献立（4/30まで）

先付前菜：鯛ゼリー寄せ、穴子押し寿しなど　猪口：アスパラ、アサリ、百合根、加減酢など　椀盛り：ヨモギ胡麻豆腐、海老二身焼など　造り：鮪、鯛、イカなど　焼き物：鮭木の芽焼き、きゃらぶきなど　小鍋：白魚玉締め、桜麩、たけのこ　酢の物：ブロッコリー昆布押し、プチトマト、帆立貝など　食事：せいろそば　水菓子：くず切り（5,500円）　（板長：薫田勝）

洋食　季節のおすすめコース（4/30まで）

真鯛のカルパッチョ風 サラダ仕立て、春野菜のミネストローネ、牛フィレ肉とアスパラガス、チーズの重ね焼き マディラ酒のソース、フルーツメルバ、コーヒーまたは紅茶、パンまたはライス（4,400円）。ランチ、ディナーともに9階レストランでもご提供します。　（シェフ：佐藤和治）

会員登録変更のお届けを

会員の入退会には所定の「変更届」を事務局へお届けください。役職変更のみの場合もお知らせください。詳細は事務局会員事務担当の杉本（電話03－3503－2727、メールsugimoto@jnpc.or.jp）までお問い合わせください。

ゴールデンウィーク閉室のお知らせ

事務局とクラブ施設（9階レストラン、ラウンジ、会議室など貸室）は5月3日～6日まで閉室します。5月7日（火）から通常通り開室します。

訃報

粕谷卓志会員（朝日新聞出身、72歳）が3月1日に、南蓁誼会員（毎日新聞出身、83歳）が同19日に、高木早苗会員（共同通信出身、94歳）が同20日に死去されました。

ご冥福をお祈りいたします。

今後の行事予定（4/2現在）

17㊌	14：15～15：15　10階ホール 「2024 米大統領選」⑤ 杉山晋輔 元駐米大使
19㊎	17：30～20：02　10階ホール 試写会「人間の境界」
22㊊	13：30～14：30　10階ホール 渕上玲子 日本弁護士連合会会長　会見
25㊍	13：30～15：00　9階会見場 著者と語る『TSMC 世界を動かすヒミツ』 林宏文 経済ジャーナリスト
5月15㊌	13：30～15：00　10階ホール 「2024 米大統領選」⑥ 渡部恒雄 笹川平和財団上席研究員

新しい個人D会員

糸永（いとなが） 正行（まさゆき）

1986年日刊工業新聞入社。経済部編集委員、第一産業部次長、日刊工業開発センター代表取締役などを経て2022年退社。現在、M&A online編集委員。

土生前専務理事にお声がけいただき、入会いたしました。初心に帰って報道と向き合いたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

古賀（こが） 攻（こう）

1983年毎日新聞入社。政治部長、編集編成局次長、論説委員長、専門編集委員などを経て2023年退社。現在、公益財団法人ニッポンドットコム顧問。

新聞記者を始めた41年前と比べると、情報の集め方から伝え方まで見事に変わりました。ただジャーナリズムの精神だけは地続きだと信じています。

白鳥（しろとり） 和生（かずお）

1990年日本経済新聞入社。流通経済部、消費産業部、調査部、日経MJデスクなどを経て2024年退社。現在、流通科学大学教授。

お仲間に入れていただきありがとうございます。生活者に根ざした流通・消費の分野を中心に取材していきます。

竹澤（たけざわ） 顕（あきら）

1983年日本放送協会入局。カイロ駐在、ニューデリー支局長、アジア総局長、スポーツ業務管理部長、アナウンス室専任局長などを経て、2017年退局。

海外の現場を離れて10年余。情報の集め方、伝え方、何よりも受けとめられ方が大きく変わった気がします。市井の一記者を目指し精進します。

西原（にしはら） 譲一（じょういち）

1982年日本放送協会入局。政治部副部長、解説委員、ニュースウオッチ9編集長など歴任。2022年からNHKグローバルメディアサービス専門委員。

政治不信について考えています。どこで間違え、何が問題か。政治のシステム？　政治家？　日本の停滞？　民主主義のあり方？　深く考えたい。

本保（ほんぼ） 晃（あきら）

1983年日本放送協会入局。科学文化部長、静岡放送局長、福島放送局長を歴任。関連会社執行役員などを経て2023年からNHKグローバルメディアサービス専門委員。

事故・災害・科学の報道に携わってきました。今後もフィールドワークを大切にしつつ、できることをしていきたいと思っています。

クラブの電話　ダイヤルイン

- 和食レストラン（9階）……☎3503-2723
- 洋食レストラン（10階）……☎3503-2766
- 貸室予約、宴会打ち合わせ‥☎3503-2724
- 受　付……☎3503-2721
- 会員事務……☎3503-2727
- 経　理……☎3503-2728
- クラブ行事への申し込み……☎3503-2722
- 会見申し込みアドレス…kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：127社
- 基本会員：716人
- 個人会員：1,034人
- 法人・個人賛助会員：53社・115人
- 特別賛助会員：95人
- 名誉・功労会員：12人
- 学生会員：53人

計180社・2,025人

会報委員会

委員長＝榊原　智
委　員＝稲澤　裕子　大石　卓見　勝田　洋人　倉重　篤郎　佐藤　庄太　志賀　英樹　二村　伸　萩原　豊　水野　雅央　本橋　春紀
（事務局：本庄五月　西村志織）

☎03-3503-2754　FAX 03-3503-7271

写真回廊

撮影：須藤　菜々子（読売新聞社写真部）

能登半島地震による断水が解消し、例年より約１カ月遅れで始まった「能登志賀あられ」作り＝２月28日、石川県志賀町

未来へ 能登の味も教訓も

２０１１年４月29日、私は東日本大震災の発災から49日ぶりに開通した東北新幹線に乗っていた。満席の乗客の大半は被災地の支援に向かうボランティアと思われ、私もその一人だった。被災地に近づくと、大漁旗や横断幕を掲げて歓迎する人たちの姿が沿線に並んだ。盛岡で新幹線を降り、三陸の復興拠点となった岩手県遠野市に行き、そこで割り当てられた被災地にバスで向かった。私は陸前高田市と大槌町の担当になり、足手まといになりつつも被災者のお手伝いができた。

発災から49日で、あれだけの支援態勢が出来上がったことに今改めて驚く。能登半島地震から3カ月。私はまだ被災地に入れていない。能登のあの素晴らしい絶景の自然は、復興支援となると一転、難攻不落の城壁のように立ちふさがる。道路の復旧はなかなか進まず、断水も続いている。

災害は、いつも人間の浅知恵を戒めるように私たちの不意を突き、見えなかった弱点をあらわにしていく。なぜか大地震は起きないと多くの人が思っていた神戸を直撃した阪神大震災。その無数の建物の倒壊を見て大急ぎで進められた耐震補強の営みは、東日本大震災の大津波にのみこまれた。熊本地震は、台風に備えて屋根を重くしていた家々を足元から崩していった。誰もが本震と思った強烈な揺れは、実は前震だった。そして、能登半島地震では大規模な隆起が起こり、交通と生業の拠点だった港までを壊してしまった。

懸命の復旧が続く能登半島で「能登志賀あられ」の出荷準備が進む。砂糖と塩だけで味付けした甘く素朴な味わいが自慢の名産品だ。美しい色合いは希望の灯（ともしび）にも見える。この光景はなんとしてでも未来へとつなげたい。あられの名前になった志賀には志賀原発がある。今回は紙一重で過酷事故を免れた。この教訓もまた未来に引き継がなければならない。

（毎日新聞出身　小川　一）